

地域住民の社会・心理的健康度の実態とその関連要因

Incidence and Related Factors of Social-Psychological Health Index in Community Dwellers

1K04A025

田島 景子

指導教員

主査 荒尾孝先生

副査 岡浩一朗先生

[目的]

わが国において、医療技術の発達などにより、現在の平均寿命は世界一となっている。一方で、少子・高齢化が進むことにより、超高齢社会へと向かっていくことが予測されている。そのような社会において現在の社会保障制度を維持していくためには、あらゆる分野において変革や改革が必要となる。医療費や介護費を適切な水準に変えるための基本的で根本的な対策は疾病予防と介護予防であり、保健分野が担うべき最大の課題である。そのような中で、健康づくりの重要性は、現在広く国民に認識されるようになり、様々な健康政策が実施されている。健康政策を実施するにあたり、その効果を評価することが重要視されるようになってきた。近年、そのような効果評価として「生活の質 (Quality of life; QOL) が注目されるようになってきている。本研究の目的は、すでに行われているようなQOL評価指標ではなく、生活満足感、やりがい感、役立ち感といった社会・心理的健康度の評価尺度を用い、地域住民の社会・心理的健康度を把握すると共に、それに関わる生活要因を検討することを目的とした。

[方法]

平成19年8月31日(金)から平成19年9月25日(火)にかけて、K地域に住居登録している者のなかから、性、年齢、居住地域についての条件を設け、層化三段無作為抽出法により、合計約2000名を選定した。調査票を対象者宛に郵送により配布し、回答は自記式記入とした。記入後の調査票は同封された返信用封筒を用いた郵送法に

より回収した。

本研究においては、社会・心理的健康度 (SPHI) による実態調査とそれに関わる検討を行った。

社会・心理的健康度 (SPHI) 得点としては、質問紙における4段階の回答をポイント化し、合計得点で評価した。その得点と、生活関連要因について、Spearmanの順位相関係数にて解析を行い、有意確率5%未満を有意差ありとした。なお、統計解析ソフトはSPSS-15.0J for Windows を用いた。

[結果]

男女における社会・心理的健康度 (SPHI) 得点の有意な差はなかったため、壮年期、中年期、高年期の3群に分けて解析した。社会・心理的健康度 (SPHI) 得点は、壮年期、中年期、高年期の全期においてほぼ正規分布をし、年齢の上昇に伴い得点も上昇した。女性より男性のほうが得点が高い傾向を示し、高年期では、男性より女性のほうがよい傾向であった。健康習慣に関わる飲酒やタバコと社会・心理的健康度 (SPHI) 得点においては、関係が見られなかった。しかし、主観的健康感とは最も強い関係性を示した。適切な食事、積極的な外出、ストレス解消法、挨拶、別世代交流、感情を分かち合う仲間、配偶者との家事協力、家族と過ごす時間、経験特技の発揮において有意な関係が見られた。

[考察]

地域住民における社会・心理的健康度 (SPHI)

の得点の評価としてはどの世代も正規に近い分布を示し、良好であると捉えられた。全体的に年代が上がるほど、社会・心理的健康度 (SPHI) の得点と有意な関係を示す項目が増え、健康関連 QOL も一般的にこのような傾向が見られることからこのような指標の特質をうまく示すことができたと思われた。健康習慣に関わる項目と有意差が見られなかったのに対し、主観的健康感とは最も強い関係性を示したことから、健康習慣が改善され、

主観的健康感が高まった上で社会・心理的健康度 (SPHI) が良好となるといった、段階を踏むことが重要であると示唆された。また、社会・心理的健康度 (SPHI) は社会生活における多くの項目との間に有意な関係が認められ、社会の多様な人々との交流が重要であることが示唆された。そして、このような関係は高齢になるほど強い関係が認められた。